

## 初期敬虔主義についての序論的考察

横 山 武

### 序

近年、キリスト教界において、敬虔主義についての関心が、にわかには高まりつつあるのは、衆知の事実である。そのような傾向は、それを支持する何らかの現代的理由があつてのことであると思われる。その原因が奈辺にあるかの詮索はともかくとして、その言葉が広く使われるようになればなるほど、その言葉のもつ意味と内容が多様に変化しやすく、人々の使い方も多種多様になつて行くことは事実である。そして場合によっては、その言葉が本来的に指示するレファレントとは異つたものまでが、混入されてしまう危険さえも起りかねない。とくに、 $\wedge$ 敬虔 $\vee$ という言葉が、信仰の本質的態度、性格に深く関係している言葉であるためか、 $\wedge$ 敬虔 $\vee$ と $\wedge$ 敬虔主義 $\vee$ とが、混乱した文脈のままに使われることも多いように思われる。

たしかに、 $\wedge$ 敬虔主義 $\vee$ という言葉は、多様な概念をその中に含んでいる言葉である。敬虔主義という言葉の意味と内容を、歴史的時間的に限定して把握しようとするのは、かなり難しいことであるのは確かである。その理由は恐ら

く、敬虔主義というのは、特定の歴史的事件を指して名付けられている名称ではなく、信仰の態度を表現している抽象的な言葉であるからであると考えられる。<sup>①</sup> いずれにせよ、混乱した用法がもたらす結果は、教会に対して建設的に作用する場合は、殆どないわけであるから、正確なかたちで、敬虔主義の歴史とその内容を理解しておくことは、いよいよ大切なことであると言わねばならないのである。

このような意図に、この論文が、いささかなりとも添えれば、さいわいこの上もないが、最初におことわりしなければならぬことは、ここでは、初期の敬虔主義——いわゆる古典的敬虔主義とも言われる——について、しかもその一部分について、焦点を合わせて考えて行くものにすぎないということである。もとより、敬虔主義について考える場合、その初期の時代に限定して考える場合にせよ、それが持つ、内包的、外延的な種々の有意義な考慮すべき課題が山積しているわけである。が、ここでは、その発生や原因、またその特徴といった一部のものについて、取り上げるにすぎないことをご理解いただきたいのである。

### その発生について

敬虔主義というものが、歴史の流れの中で起ってきた一つの事柄である以上、その発生について、その当時の歴史的な状況が大きく関係していたであろうことは、当然考えられることである。なかでも、それが最も顕著な形で出て来たドイツにおける歴史的な状況と要素は、深いかかわりをもっている。

敬虔主義は、一七世紀の正統主義ルター派教会の冷却した状態に対する福音的は正運動として起ったとも言えるし、また、当時の正統主義教会を支配していた極端な知的面の強調への反動として現われた、という性格をもつものであったという風に、一種の、当時の状態に対する反動運動的なものとして起ったと捉えることもできよう。<sup>②</sup> ローマ・カトリックの教会史家、ジョセフ・ロルツも、彼の「教会史」の中で、つぎのように言っている。

「プロテスタント諸派の神学は、いつもせんさく好きな理窟ばかりこねて空理空論に終始しているし、カルヴィン派はカルヴィン派で法的制裁を加えてくるので、敬虔主義という反動が起ってしまった。ここでも、教義のいちいちの定義は重要でないと考えられた。こういう態度は敬虔主義を組織的プロテスタント教会の枠外に置き、その増大して行く感情的傾向は敬虔主義を単なる信者集会のようなものにしてしまった。」

(J・ロルツ「教会史」(神山四郎訳) 五六二頁、原書名は *Geschichte der Kirche in ideengeschichtlicher Betrachtung*)

これらのことからして、その当時のドイツの教会の状態が、敬虔主義を生む一つの大きな要素になっていたことは、否定し得ないところである。したがって、当時の正統主義ルター派教会がどのような注目に値することが必要となる。たしかに、正統派ルター派の教会内には、ヨハン・アルントのような神秘主義の傾向も含まれており、これらのものが持っていた、個人主義的に内面化されて行く敬虔的な傾向は、確かに、この敬虔主義の起ってくる準備として働いていたと言うこともできよう。<sup>③</sup> そのような点から見れば、正統主義ルター派教会内に、敬虔主義の発生のために、それを助けるものが存在していたとも言える。

さて、当時の正統主義ルター派の状態について言えば、そこでは神学の哲学化とも言うべき状況が支配的であった。つまり、アリストテレス主義の採用がなされ、その影響が勢力的に各面におよんでいたのである。<sup>④</sup> これは、一六世紀において始まり、間もなく、ドイツの知識階級にとっては、不可欠な教養的要素となつて行く。難解な哲学用語や概念が、一七世紀のプロテスタントの著作や教えなどのあらゆる分野で使われるようになる。三十年戦争の最中で

すら、ドイツ貴族たちは、お互いの文通においてさえ、哲学术語を用い、もっぱらラテン語を使っていたのである。このようなことによつて、ドイツでは、ドイツ語による国民文学の成長が、百年は遅れることになったと言われているほどである。

このような事実と関連して、神学的な内容についても、変化が起つてきている。正統主義ルター派内の、当時の神学的特徴の一つは、神の非人格化ということであつた<sup>⑤</sup>。このような神学的状況がもたらされた原因としては、二つのことが考えられる。一つは、ルターの後継者たちが、ルターが体験したほどの深い神体験をもつことができなかつたということである。それゆゑに彼らは、ルターほどに深い人格神の理解をもつこともできなかつたわけである。ルターが、長い試みのうちにはじめて福音の中に見出した平安というものは、後のルター派においては、人生得的なもの V (inborn) になつていた、と言われる<sup>⑥</sup>。

もう一つの原因は、彼らが、自然神学の問題に多くの関心を奪われていたことである。神についての、キリスト教の見解とアリストテレスの見解とを調和させようとするに、非常な努力をついやした。すなわち、聖書の神と哲学者の神をどのように一致させることができるかが、当時の彼らの最大の関心事であつた。

このような状態の当然の結果として、民衆への関心の欠如が起つてくることは、当然でもあつた。それはまた、ラトレット教授が言うように、伝道事業の怠慢をももたらした。彼はその理由として、いくつかのことを挙げてゐる<sup>⑦</sup>。さらに、宗教改革時代の不完全な地理的知識に起因することであつたが、福音が、地球上で人の住み得るあらゆる地域にすでに伝えられたと考へているプロテスタントのキリスト教徒が圧倒的に多かつたことも事実である。だが、当時の状況の背後に、どのような理由があつたにせよ、ルター派の指導者たちが、長大な神学的討論や出版物のためには、時間や機会や資金をみつけたが、伝道には全く意を用いなかつたということは、一七世紀のドイツにおける教会

の状態を良く示すものである、との指摘は、当時の状況を適切に表わしている。

さらにまた、ルター派教会において問題になつたことに、倫理的意識の衰微がある。当時は、すでに、宗教改革から受け継いだ種々の遺産が、風化されてしまつてゐた。そしてやがて正統主義の教義学からは入愛について V の項目が抹消されてしまつてゐた事実を見ることが出来る。教義学と倫理学が区別されるに到つた結果として、ルター派教会の神学がますます教理偏重に傾き、自派の神学的立場の弁護だけに終始するようになって行く。そのようにしてもたらされた倫理的なものの軽視は、しばしばそうであるようにそれを実践することへの軽視と無視をも伴うこととなつて行つたのである。

さらにまた、当時の正統派が、民衆との接触を失つていたということは、彼らが遭遇した、あのような民族の悲惨な経験とも言うべき三十年戦争についても、ルター派の神学における歴史的な著述の中にほとんど言及してゐないという事実からも推察できるものである。三十年戦争は、ドイツの人口の半分を失わせるほどの激しい試練であつたのであり、またそのことによつてドイツが、他のヨーロッパの国々に比べて、近代化において決定的な遅れをとることになつてしまう原因となつた不幸な出来事であつたわけであるが、その三十年戦争とその後の状態についての言及の欠如は、それによつて、一般の民衆や民衆の教会が経験してゐた激しい試練に注意を払わなかつたことのあらわれであると言へる。この事は、正統主義ルター派の指導者たちが、人々との接触をいかに失つてゐたかを現わす事柄であると言へるであろう。従つて一般の民衆は、取り残され、無視されたままで、その魂の状態が満たされずに空ろなままで放置されていたという事実があつたことを、我々は十分に納得できるのである。

さらに正統主義は、たんに神学的、教理的主張であるということ以上の事柄を意味してゐた。それは、政治的な性格をも合わせもつていたという事実による<sup>⑧</sup>。歴史で明らかなように、アウグスブルグの講和(一五五五年)は、一

応、宗教的な自由を保証したものであった。それは、ローマ・カトリックとルター派のキリスト教信仰のいずれでも選ぶことのできた自由であった。しかもこの選択の自由は、世俗的な勢力によって、それぞれが保証されるという性格をもつものであった。いわゆる入住民はその領土の信仰に従うVという形式である。したがってそのことから、教会と国家との間には、非常に近い、緊密な関係ができて来たわけである。そして一種の信仰的な国家という形をなして行くことになる。事実、国家に奉仕する役人はすべて、アウグスブルグ信仰告白を支持し守る旨の誓いを義務づけられ、また、領主たちは、教育、文化、生活の領域において、領民たちを教会の支配下に置こうとした。また教会も、そのようなあり方を支持してきた。正統派の教職たちは、従って、政府を支持し、政府に依存する状態にあった。これらのことはまた、別の面で言えば、確かに、ルター派の領内から、カトリックやまた他のカルヴァン派やアナバプテストたちが出てくるのを防ぐようにも働いた。すなわち、純粋にルター派だけである状態を保つのに貢献した。<sup>⑩</sup>

しかし同時に、このようなことは、信仰と政治を、直接的に結びつけてしまう方向への働きを促進したこともあった。そして当然このような両者のかかわり合いは、信仰の個人的なあり方の尊重や、それに関連して考えられる多様性と柔軟性を保つことを犠牲にする結果をもたらした。またさらにこのことは、内容、内実にまさって外形的なあり方を重視する傾向を生み出す危険も多量もっているものであった。

当時の正統主義教会がもっていた以上のような状況は、敬虔主義の運動がそこから出てくる有力な苗床であった。さらに、J・ペリカン教授によれば、「敬虔主義の運動の諸原因は、ドイツの政治および教会教区的生活に深く根ざしている」ことを指摘し、とくに教会教区的との関連については、リッテナルにおいても無視され、今後の研究の必要なが指摘されている。<sup>⑪</sup>

以上のようにしてその発端をもつに到ったドイツ敬虔主義は、しかし、ドイツにおいて起る以前に、その先駆をもつていたとすることができるのである。それは、敬虔主義的傾向と呼ぶべきものであるかも知れないが、改革派の地域で最初にはじまったものであった。人々の生活が豊かになって、世俗化して行くオランダの教会の傾向に心を痛め、ユトレヒト大学の教授であったフートが、小さな群の集会を教会内に作ったのである。<sup>⑫</sup> さらに、イギリスのピューリタニズムやフランスのクイエティズムの影響も指摘されている。<sup>⑬</sup>

### その一般的特徴について

ここでしばらく、敬虔主義が持っている特徴について考えて見ることにする。一般的なものに関してのみである。なぜなら、具体的な事柄については、各時代の敬虔主義の指導者たちの思想と神学に非常に深くかかわっているで、それぞれの生活や活動と関連づけて考察するのが適切であると思われるからである。

敬虔主義は、まず第一に、教会的な敬虔ではなく、個人的、心情的な敬虔を重んじたものであるといえよう。同時にまた実践的な生活訓練の面も重視し、敬虔主義自体が、正統主義のあり方の中では満足できない人々の中から出て来たものなので、人格的な関係と共に、人々の日常の事柄との関係をとくに強調した。さらに、教理の形式より内容としての敬虔を重んずる面を發展させると、敬虔主義は神秘主義の系統に近づくものであるとも言えるが、この点では、シュペーナーの思想の背景にヨハン・アルントの「真のキリスト教」等の影響が強かったことを考えれば、うなずけることである。たしかに敬虔主義は、はじめから、神秘主義的スピリチュアリズムの要素を内包していたし、その面からも、地区の既存の教会の範囲に留まって、それから出ようとはしなかった。むしろ、国教会内の小さな敬

虔敬社会を形成することによって、内面化を深める方向に進むのである。そのあらわれが教会内の教会 (ecclesiola in ecclesia) である。

教会の働きに参与する事についてや、日常の虔敬な生活の必要については、教職も信徒も区別なく求められる事柄として主張されたことも、特徴と言えよう。さらに敬虔主義が強調したものは、聖書の個人的な研究の重視である。これは当時の正統派教会の神学理論偏重のあり方に対する一つの警告的強調であった。そしてこのような敬虔主義の傾向は、宗教改革の精神を、当時の時代に生かすための一つの姿勢でもあったわけで、その中でも、キリストの福音の事実を、個人的次元で、個人の内面の事柄として受けとめることの強調は、やがて、個人の回心と回心の体験を重視する特徴を浮き上らせるようになる。そして、回心の体験に基づく新しい生活の喜びと、完全な聖化への熱情の中に生き甲斐を見出そうとする傾向が支配的になって行く。このような傾向は、時には感情的な熱心さが過度に高まり、妄信に近くなるような危険がないわけでもなかった。

ここでさらに、敬虔主義の、見のがされやすい社会的貢献を指摘しなければならぬ。というのは、正統主義ルター派の教会においては、前述のように、過度にラテン語が使用され、アリストテレスの哲学が支配的である雰囲気があり、その中で種々の研鑽がつまれていたわけであるが、敬虔主義の運動においては、そのようなラテン語の使用から、ドイツ語の使用に変えて、国民文学の発展に多大の貢献をしたことである。この面から、敬虔主義者たちの中でも、とくに賛美歌作家たちの存在は、ドイツ語の国民文学の発達に貢献した点で、非常に大きいものがあつたと言える。

また、敬虔主義の特徴として見落してならないのは、教派という形態をとらなかつたので、個人的敬虔として把握られ、伝えられて行くものとなったことである。そしてこのような敬虔主義の性格が、かえって国民的限界を越える要素として働き、国際的に進展して行く条件づくりをしたと言える<sup>④</sup>。このように、個人的敬虔として把握られたと言

うことが、また同時に、政治への関心からも自由であり、国教会とのつながりも拘束されない形であり得た所以である、と言われている。またさらに、敬虔主義は、精神的な面では宗教改革やピューリタニズムの精神を受け継いでいながらも、必ずしも、それと同じ軌道をたどらなかつたと言える<sup>⑤</sup>。

敬虔主義の、正統主義に対する関係は、しばしば、英国の国教会におけるピューリタニズムや、カトリックにおけるヤンセニズムなどの場合と似ていると言われるが、しかしそうとばかり言えない要素もある。すなわち、ピューリタンがアングリカン教会とその政策に反抗して、政治的な活動に深入りし、そこから、教派を形成して行き、独自の教派形態をつくり出したが、そのために種々の試練を受けなければならなかつたわけで、そういう点でピューリタンのあり方とは性格を異にしたと言えるわけである。

ここに、英国国教会に対するピューリタンの態度と、ドイツ正統主義に対する敬虔主義の態度の違いを見ることができよう。すなわち、ドイツ敬虔主義の運動は、教派を形成する苗床とはならなかつたのである。また、国教会の体制を破ろうとするような姿勢も、そこからは生れてこなかつたということである。敬虔主義の影響のもとに生れたメソヂイズムが、国教会から独立して教派を形成しようとする動きが、すくなくともウエスレーの生存中は実現していない事実は、その特徴を反映している傾向であると言えよう<sup>⑥</sup>。

ドイツの敬虔主義的諸派が、ある程度教派的性格に近づいていながらも、しかし教派として独立するに到らなかつたのは、その理由としてそれらの国で、国教会の力がかなり強くあつたことにもよるのであり、また国教会の制度を支持する国民的な支持も強かつたゆえであると言われる。要するに、国教会の制度を否定するような国民的意識も勢力もそこにはなかつたのであり、それらの要素が、やはり敬虔主義をして、教派を形成するように促さなかつた外的な理由、要因にもなつていると言えよう。

また敬虔主義は、その神学的体系をも作る事がなく、むしろ受動的な立場に立つことによって存在したものであるとも言える。

さらに、敬虔主義者たちが、教会から分離しようとしなかったという点については、たとえば、フランケなども、ハレにおいて、大規模な教育研究所ともいべき機関を作り、大きく発展する組織をもっておいたし、また、社会的事業や宣教事業なども、広範囲にわたって行ったのであるが、当時の国教会から分離しようとはしなかった。また後になって、ツインツェンドルフも、一時は正統主義教会から追放されたこともあったが、彼は敬虔的修練を努める者の集団の指導者として活躍していたわけであるが——それでも、教派として独立しようとする方向には動かなかつた。

もつとも、それらの中でも、教会との間に摩擦を生じて分離した人々も、敬虔派の中から出ていないわけではない。たとえば、有名な教会史家のG・アーノルド（もつとも、この人は後に復帰したが）、神学者のJ・デッペル、賛美歌詩人のG・テルシュテューゲンのような人々が分離して行ったのも事実である。しかし、彼らとても、個人的な信仰を重んじての行動であり、それによって特定の教派を作るといような方向へは全く進もうとしなかった。

たしかに、敬虔主義は、北部においては、おもに貴族階級など上流部分に伝えられたのであったが、西南ドイツの領邦ヴイルテンベルクでは、静かな発展の様相をたどり、市民や農民の間に根をはって行った。また正統主義派の教会指導者たちも、それを積極的に支持した。学問的な神学上の事柄としても、それは真面目な研究対象として取り上げられた。このような面で敬虔主義は、穩健に発展して行くことができた。ここでは、良い意味での聖書主義が成立し得た<sup>⑩</sup>。その最も純粹で深い代表者とも言うべき人物が、ヨハン・アルブレヒト・ベンゲル（一六八七—一七五二）であると言えよう。彼は新約聖書研究に生涯を捧げ、二〇年の労作といわれる不朽の名著『グノモン』の著者でもある。

また敬虔主義は、一つには倫理的感觉を洗練したこと、そして正統教会から足が遠のいて行きはじめた世代の人々に、神への敬虔と正統主義教会の信仰とは別のものであるとの意識を与えることができた。これにより、従来の教会生活から離れており、またそれには無関心だが、しかしなお、信仰の道へ心を開く可能性を残していた多くの人々に對してキリストに向かう道を備えた<sup>⑪</sup>。

敬虔主義をこのように見て行くとき、そこに見られる近代的な性格を評価することを忘れてはならないであろう。それは、彼らが、洗礼という外形的な形式よりも、回心という内実を重視したこと、また教理それ自体よりも体験を重視したこと、すなわち教會的形態よりも個人的形態を優先させたことであり、その点で彼らは近代に属するものを持つていたと言うべきである。また教會的敬虔から個人的敬虔へと移行して行く傾向というものは、キリスト教の敬虔を主観主義の時代へと移すための唯一の可能な形であったと言えることができる。

敬虔主義が宗教改革の系譜に属しながら、独自の位置をしめたということはその歴史的な意義が非常に大きく、この敬虔主義の動きを考慮することなしには、宗教改革から近代キリスト教への発展を正しく受けとめることはできない<sup>⑫</sup>。

そしてこの敬虔主義は、ヨーロッパ精神史上、きわめて固有な位置をしめ、またプロテスタント思想を総合するものであり、一九世紀の宗教思想を導く根源をなした。少なくとも、ドイツにおける神学会は、これによって導かれた。そして、ゲーテ、カント、シュライエルマッハをもつて始まる思想史をひもとけば、そのことは明らかである<sup>⑬</sup>。そして、近代キリスト教史上最も意義のある運動の原動力となったという事実は否定できない<sup>⑭</sup>。同時にそれは、宗派時代から近代へと変化する歴史の中の過渡的現象としても消えることのない意義を評価されている<sup>⑮</sup>。

しかしながら他面において、敬虔主義は、時代の要求に適切に答えて得るような新しい神学を形成するにいたらなか

ったことも事実である。それゆえに正統主義の支配が依然としてそのままに続き、その結果、合理主義が十分に発達し、やがて支配力をもつにいたってしまったとの指摘もなされている。<sup>24</sup> このことは敬虔主義が、正統主義への一つのアンチテーゼ的な性格を持つものとして始まり、そこから積極的に踏み出そうとしなかったことによる、敬虔主義の内在的な限界を示すものと言える。また、敬虔主義の個人的な敬虔の強調は、進行しつつあった世俗化を防ぐためには防波堤として不十分であったし、心情的な敬虔が幅をきかすところでは、学問的な研究は、とかくさまたげられる傾向があった。さらには、その時代にあらわれてきた神学的な危機に対しても、それを克服することはできなかった面も指摘できよう。もっともこのことに関しては、敬虔主義のみならず正統主義においても、同じように克服できなかったのであり、このようにして、歴史は合理主義の時代へと進んで行くことになるのである。

### 初期の指導者シュペーナー

ここで指導者を取りあげることには、きわめて舌たらずのものになってしまうことを恐れるのだが、ドイツにおける指導者であるシュペーナーに限って考えて行くことにする。

フィリップ・ヤコブ・シュペーナーの生涯は、<sup>25</sup> 彼が一六七〇年にフランクフルト・アン・マインの牧師をしていた折に始めた「敬虔集会」(Collegia pietatis) によって、敬虔主義の父となるべく歩みはじめたと言ってよいであろう。彼はそれより四年前に、そこへ赴任したのだが、教会で語られる説教が神学的な理論に流れ、人の心情にふれることの少ないことに不満を感じていた。さらに三十年戦争以後、荒廃した社会の中で硬直した教会に生気をとり戻すために、彼の牧会によって回心を経験して新しい生活に入った人々を対象にして、それらの人々の霊性訓練と成長の

ために始めたものであった。

はじめは、彼のよびかけに応じた人々と共に、彼の家で、おもに信仰書(神秘主義的傾向の著作が多かったらしいが)を取り上げて研究をすすめていた。ただし一六七五年からは、もっぱら聖書を用いて集会をするように変化して行った。そこでは同時に、祈りや断食などの実践的な信仰の指導もなされていた。

一六七五年には、『敬虔な願望』(Pia desideria)の名称で知られる、敬虔主義の基本的指導書ともいべき本を出版した。ここで彼は、三つの部分にわかれているこの本の第三部で、真の福音的教会の改善のための六つの提言をし、神学の論争や研究よりも、生き生きとした内的信仰の生活を実践することの重要性を訴えている。この比較的穏健な改革の提案は、多くの人々の反響を呼んだが、同時に反対の声もあがり、ヴイッテンベルク大学神学部では、シュペーナーの本では、二八四の誤りがあると細かく指摘するようなこともあった。もっとも正統主義教会からの、このような枝葉的な指摘があることは、彼らがまだ、敬虔主義運動の本質的な性格を理解していなかったことであらわれであったとも言えるであろう。

ついで一六八三年、ドレスデンの宮廷説教者の職に就く。当時のルター派においては、かなり名譽のある職務であったので、今までより多くの影響力を与えることのできる立場であった。とくに、ライプツヒ大学への影響力のあらわれとして、しばらく絶えていた聖書研究を再びはじめ、自ら担当することになる。A・H・フランケ、J・K・シャーデ、P・アントンらは、シュペーナーの主張と立場を支持するが、不賛成の人々は、シュペーナーとその同調者たちを「敬虔派V」とあざけりを込めて呼んだ。ここから、彼らとその流れの人々は、敬虔主義者と呼ばれるようになった。

ドレスデンでは、宮廷内の退廃的な空気を、彼の敬虔主義的立場からかなり大胆に批判したことや、とくにザクセ

ン選帝侯ヨハン・ゲオルク三世との行き違いがあり、ニコライ教会付属の監督区長としてベルリンへ転出することになる。一六九一年である。このことにより彼は、ハレ大学を敬虔主義の拠点とするための道を歩む機会を得ることになる。

一七〇五年に彼が最後を迎えたときには、敬虔主義の運動はすでに後継者の指導のもとにあった。ハレ大学を中心にして、シュペーナーとはその性格も行動も正反対であったオーガスト・ヘルマン・フランケが、第二のリーダーとして敬虔主義の運動をさらに発展させつつあった。そこにはまた、敬虔主義にとっての新しい試練と課題が待ちうけてはいたが、いずれにせよ初期敬虔主義の第一段階は終り、第二段階が始まりつつあったのである。

注

- ① 石原 謙、『キリスト教の展開』岩波書店、昭和四十七年、五七六頁。
- ② Williston Walker, *A History of the Christian Church*, (T. & T. Clark, 1968) 四四四―五頁。
- ③ Kenneth Scott Latourette, *A History of Christianity*, II (Harper & Row, Publishers, 1975) 八九四―五頁。
- ④ ヤロスラヴ・ペリカン (高尾利教訳) 『ルターからキェルケゴールまで』(聖文舎、一九六七年) 八八頁。
- ⑤ 同書、一〇七頁。
- ⑥ 同書、一〇七頁。
- ⑦ Kenneth Scott Latourette, *A History of the Expansion of Christianity*, III, Three Centuries of Advance (Zondervan, 1970) 二五一―六頁、部分的に概訳すれば次のように言われている。  
「最初に、運動の初期の段階では、……プロテスタントはローマ・カトリックが占めていた位置に取って代るのに余りにも忙しく、西欧以外の非キリスト教徒たちに関心を向ける余裕をもたなかった。

第二に、……プロテスタントの初期の指導者のある人々は、非キリスト教徒にキリスト教の使信を宣べ伝える義務を否定した。ルターもメランヒトンとともに、この世の終りが緊急にさし迫っているので、福音を世界中に広めるための時間はないと考えていた。『すべての造られしものに福音を宣べ伝えよ』との新約聖書の大命令について、ルターは、最初の十二使徒にのみかわるものであるとみなしていた。……

第三の原因としては——最初の指摘に関連があるのだが——プロテスタント側では、ローマ・カトリックからの分離によってひき起された戦争によって手一杯であった。この種の衝突はとくに、ドイツ、フランス、オランダにおいて激しかった。プロテスタントには、自己の存在をかけた戦いであり、西欧以外のことについて関心を払う余裕がなかった。

第四の理由としては、非キリスト教徒に対してキリスト教の使信を広めることについてプロテスタントの政府がかなり無関心であったことである。プロテスタントの大きな群はほとんど国教会であって、世俗の権威のもとにあった。非キリスト教徒がキリスト教の信仰を伝えられるべきであるということについて深い関心を寄せたプロテスタントの君主はひとりもなく、この点、スペインやポルトガルのローマ・カトリックの国王とは異なっていた。……

第五に、プロテスタントには、千年以上にもわたって信仰伝播の主要な手掛りとなった修道士がいなかった。たとえプロテスタントは、非キリスト教徒に福音を伝える関心をもったとしても、彼らにはそれを伝えるための手掛りとなる機構が整備されてはいなかった。……

第六に、このことがプロテスタントにおいて非キリスト教徒にたいする伝道が積極的に行われていなかったおもしろい理由だが、十七、十八世紀までは、彼らは非キリスト教徒と接触することがほとんどなかったことである。イスラム世界との境界にあるプロテスタント教会はほとんどなかった。英国とオランダの海運力が抬頭し、非キリスト教徒との直接の通商交渉が行われるようになるまでは、そのような状態であった。」

⑧ ヤロスラヴ・ペリカン、前掲書、一三七頁。

⑨ オットー・W・ハイック (賀来周一訳) 『キリスト教思想史』(聖文舎、一九六九年) 五九五頁。

⑩ 同書 五九五頁。

⑪ ヤロスラヴ・ペリカン、前掲書、一六〇頁、注四。

「これは、私には、Ritschl が無視している領域の一つであると思われる。資料を見いだすことは困難であろうが、敬虔主義を



可能にした諸条件を評価しようとのいかなる試みにおいても、宗教改革に続く二世紀間の、ドイツにおける類別された教区 (assorted parishes) についての綿密な研究が必要であろう。」

- ⑫ W・V・レーヴェニヒ (赤木善光訳) 『教会史概論』(日本基督教団出版局、一九六九年) 三三三頁。  
⑬ 石原 謙、前掲書、五七五―六頁。

「初めは第十七世紀初オランダ改革派教会におけるテーリング一族の信仰修練より始まり、イギリスのピューリタニズムの刺激を受け、フランスのクイエティズムの影響にもあざかり、ドイツのヴェルテンベルク、ライン地方の改革派にも接触し、ついに中部ザクセンから北部ルター派教会内に拡まって運動を展開し」たことが指摘をわけてゐる。

- ⑭ Clyde L. Manschreck, ed., *A History of Christianity*, II. (Prentice-Hall, 1964) 二六七頁。  
⑮ 石原 謙、前掲書、五七五頁。  
⑯ 同書、五七七頁。  
⑰ W・V・レーヴェニヒ、前掲書、三七八頁。  
⑱ Johann (Johannes) Albrecht Bengel 彼は、チュービンゲンで学び、一七〇七年にルター派教職となった。一七二三年にゼンケンドルフ神学校教授となり、その後、ヘルフレイトインゲン (一七四一年)、アルピルスバッハ (一七四九年) などで教会の働きにたずさわる。彼の古典的名著「新約聖書講解」(Gnomon Novi Testamenti) は一七四二年の出版である。以上は、F.L. Cross, ed., *The Oxford Dictionary of the Christian Church* 4th ed., J. D. Douglas, ed., *The New International Dictionary of the Christian Church* による。  
⑲ W・V・レーヴェニヒ、前掲書、三八―二頁。  
⑳ 石原 謙、前掲書、五七六頁。  
㉑ 同書、五七八頁。  
㉒ 同書、五七八頁、敬虔主義が、近代キリスト教の歴史において、最も有意義な運動の原動力となったことについて記している。最良の本として、著者は Johannes von Walker, *Geschichte des Christentums*, Bd. II, 1938 を挙げている。  
㉓ W・V・レーヴェニヒ、前掲書、三八―一頁。  
㉔ ヤロスラフ・ペリカン、前掲書、一四―一頁。

⑫ Philipp Jakob Spener (1635-1705) エルザスのラポルツヴァイラーに生まれ、宗教的な雰囲気の中で育てられる。それは、ピューリタン主義とアルント的な神秘主義的敬虔が入り混じったものであった。ストラスブルク大学で勉学中すでに、彼の敬虔的な行動は学生間に周知の事実となっていた。一六五九―六二年の、バーゼル、ジュネーブ、シュタットガルト、それにチュービンゲンへ留学中に、改革派の神学と教会にふれ、とくにイエズス会からカルヴァン派に改宗したラバディ (Jean de Labadie, 1610-74) の影響を受けた。

一六六三年、二八歳のときに再びストラスブルクに帰り、牧師と大学講師とを兼ねることになる。フランクフルト (一六六六年)、ドレスデン (一六八六年) と移り、一六九一年にはフレデリック侯との問題からベルリンへ移る。その間、種々の困難や反対に遭遇しながらも、敬虔主義は急速に人々の間に広まって行く。一六九四年にはシュペーナーの影響のもとにハレ大学が設立され、その神学部は、敬虔主義の強力な砦 (とりで) となつて行く。  
W・V・レーヴェニヒの前掲書は、つぎのように彼について評している。(三七四―五頁)「シュペーナー自身は指導的人物でもなければ、戦闘的性質の持主でもなかった。彼の諸思想は彼自身が考え出したものではない。それにもかかわらず教会史は彼に重要な位置を与えねばならない。やはりこの小心であつて、全然天才的でもない男がドイツ敬虔主義の父である。」

⑬ 一六七五年に出版されたこの本の表題は、長い副題を伴つたものである。「敬虔な願望あるいは真の福音主義教会の御旨にかなう改革のための心からの願い——この目的達成のためのいくつかのキリスト教的提案と共に」という表題は、この本の目的を現わしている。決して大部のものではないが、敬虔主義について考察する場合、その意図した所を理解するためにも、また当時の状況をうかがい知るためにも貴重なものである。

本の構成は、最初に、挨拶と執筆の事情の説明——いわゆる序文に相当するもの——があり、続いて三つの部分に分けて記されている。第一部——このような区分の名称があるわけではないが——では、教会の墮落した状態が概観されている。世俗の權威の欠陥、教職者の欠陥、一般人の欠陥、そしてそれらの欠陥のもたらす罪過が述べられる。

つぎには、教会の改善の可能性が言及され、最後の部分では、教会の正しい在り方への提言がなされている。提言は六つあり、聖書にさらに親しみ頻繁に用いること、霊的祭司職の実行 (信徒の教会における奉仕活動)、キリスト教の知識よりも実践の重視、神学論争における節度と愛の必要、神学教育における敬虔と実践を重視する改革、そして信仰を育て高めるための説教の必要である。

英訳されたものとしては、Theodore G. Tappert, trans. & ed., *Pia Desideria* (Fortress Press, 1964) が、英訳者による解説的序論も備えており有益である。

⑳ シュペーナーが宮廷説教者として、ザクセン選帝侯の飲酒癖を手紙でたしなめたことが、侯の怒りにふれ、両者の反目の原因となった。

(東京中央バプテスト教会牧師、聖契神学校講師)